



ÅLESUND KOMMUNE

オーレスン



NOK 20.-

オーレスンへようこそ！

このガイドブックでは、オーレスン（Ålesund）の旧市街と新市街を散策した後、アクスラ山（Aksla）の山頂までを2時間かけ歩くルートをご紹介します。

観光案内所のあるスカーテフルーカイア（Skateflukaia）という波止場から始めることにしましょう。

道中では適宜、ガイド中央にある地図を使ってください。



適切なルートを選びましょう

ここに書かれている道は基本的に誰でも利用できます。しかし中にはとても急な傾斜のものもあります。

もし小さなお子様連れ、あるいはベビーカーや車椅子をご利用の場合は、地図上の1から9へ行く短いルートがおすすめです。





シェトランド・バスのモニュメントを右手に、スカテフルーカイヤ波止場から。

1

スカテフルーカイヤ波止場

波止場の端には、1940年から1945年に活躍したノルウェー海軍の特殊部隊、シェトランド・バス(Shetland Bus)を記念して作られた国の記念碑があります。第二次世界大戦中、オーレスンは「小さなロンドン」と呼ばれていました。市街地で非合法的レジスタンスが活動したことや、多くの人々がオーレスンを経由してイングランドへ逃れたことが理由です。この記念碑はスンモーレ(Sunnmøre)の彫刻家オーラ・スターヴセング(Ola Stavseng)によって製作され、1995年5月8日にノルウェーのホーコン皇太子によって公開されました。

スカンセカイヤ波止場(Skansekaia)は1600年代に建てられた古い砦、もしくは要塞にちなんで名づけられました。ここには現在最も大きな波止場があり、沿岸急行船フッティルテン(Hurtigruten)もこの波止場の西側に停泊します。今ではこの砦の跡を伝えるものは何もなく、スカンセカイヤ波止場やスカンセガータ通り(Skansegata)という名前だけが残っています。



スカンセカイア波止場方面の眺め



スカンセカイア波止場

スカンセカイア波止場の一番奥にある白くて長い木造の建物は、オーレスン港湾委員会です。フッティルーテンはこの波止場に一日に二回停泊します。その他の高速船はスカンセカイア波止場からオーレスンの沖合の島々に向かって出発していきます。

1904年にオーレスンで起きた大火災の記念碑「イグニス (IGNIS)」は、白と黒の柱からできています。この記念碑では、大火災後の時代の写真を見ることができます。この記念碑はオーレ・リスレルー (Ole Lislerud) によって作られ、2004年に行われた大火災の記念式典に合わせて公開されました。

アルネ＝マッティン・ハンセン (Arne Martin Hansen) の銅像「フンネヴァクタ (Hundevakta)」は第二次世界大戦中のノルウェー人船乗りを記念して作られました。





イラストレーターのタリエ・オールセンが描いた
炎に包まれた1904年のオーレスン。(左) 1904年、
焼け野原となった町

オーレスンの大火災

1904年1月23日午前2時15分、警報が鳴り響きました。ネードレ・ストランガータ通り39(Nedre Strandgata 39)にあったオーレスン・ブリザーヴィング社の工場から出火したのです。たった24時間のうちに、実に850棟もの建物が全焼しました。この火災により1万人以上が家を失うこととなりましたが、死者は1名のみに留まりました。

これほどまでに巨大な炎が燃え広がったのは、南西からハリケーン並の強風がオーレスンの町に吹き付けたからでした。その3年後の2007年には、1年間でおよそ400棟の家が建て直されました。これほど多くのノルウェー人建築家が一つの都市で、このように大きなプロジェクトに従事するというのは珍しいことでした。その結果オーレスンは、世界にもまれなユーゲント・シュティール（アール・ヌーヴォー）建築の街として生まれ変わることとなったのです。「ユーゲントJugend」は“若さ”を意味するドイツ語で、1896年にドイツで初めて出版された新しい雑誌『Die Junged』の名前にもなりました。



建て直されたアイナールヴィークガータ7の家
の細部
(左) 大火災直後、食料を求めて列をなす人々

ユーгент・シュティール (アール・ヌーヴォー)

フランス語では「l'art Nouveau」、英語では「New Style」と表現されます。アール・ヌーヴォーのスタイルは1890年代半ばから1910年代まで流行し、特に1900年のパリ万博以降、ノルウェーで大きな進歩を遂げました。

アール・ヌーヴォーは建築、芸術、工芸、家具、絵画などの全ての分野に現れています。自然の形がそのまま、あるいは様式化された上で使われ、自然の世界からインスピレーションを受けていることが見てとれるのです。国家主義もしくは民族的ロマン主義の特徴を見いだす事も出来ます。家の壁に描かれている多様な装飾に目を向けてみてください。花、葉、茎が絡み合い、また、そこに動物や人間の顔が融合していたりと新たな発見があるはずです。



コンゲンスガータ19の装飾。
タリエ・オールセンはアール・ヌーヴ
オー様式でマンホールカバーをデザイ
ンした。

足元にも注目してみましょう。実はマンホールカバーもアール・ヌーヴォー様式なのです。これは、オーレスンにある建物の様々な特徴を組み合わせて作られました。中心にある飾り結びは文化財に登録されたアイナルヴィークガータ7 (Einarvigata 7) にあるデーヴォル家の屋敷 (Devold Villa) の門柱の装飾からきています。その脇にアーティストのタリエ・オールセン (Terje Olsen) によりバラとチューリップが加えられました。

タリエ・オールセンは、アポテケルガータ10 (Apotekergata10) のステンドグラスの窓からも着想を得ています。一番上の部分はコンゲンスガータ19 (Kongensgate19) の角にある建物に付いている神話的な装飾がモチーフです。1904数字は、オーレスンが大火災に見舞われた年を表しています。

スカーテフルーカイア波止場を出発し、観光案内所を通過するとスカンセガータ通りに出ます。この通りは1970年代に作られました。それ以前はこの辺りまで海で、左手に見える建物は元々倉庫でした。

では、スカーレガータ通り (Skaregata) の建物の間を抜けて、コンゲンスガータ通りまで行きましょう。



コンゲンスガータ25の細部



コンゲンスガータ通りの南から北を見る



コンゲンスガータ28の細部





コンゲンスガータ25

2

コンゲンスガータ通り (歩行区域)

海に向かって北に歩くと、コンゲンスガータ25があります。この建物は正面部分のみ古く、その背後は新しい建物になっています。これには秘密があります。元々この建物は通りに面した側に店と住宅があり、反対側の海に面した側には倉庫がありました。しかし、1970年代の初めに起きた火災で焼け、無事残ったのはコンゲンスガータ通りに面した正面部分だけでした。この部分も取り壊し、新しく近代的な建物にしようという案も出ましたが、粘り強い都市計画主任のオーラヴ・ホイダール(Olav Høydal)のおかげで、建物のオーナーも残った正面部分を活かし、その後ろに新しい建物を建設することとなったのです。

道の反対側のコンゲンスガータ28はビョルクネス・スコーレ学校(Bjørknesskole)の建物です。コンゲンスガータ25と比べてみると、建築上の大きな違いを見て取れます。両方とも先述の大火災後の同時期に建てられたものですが、コンゲンスガータ28はヨーロッパ中部のアール・ヌーヴォー様式を帯びています。一方25は古いノルウェー様式に影響を受けています。この様式はキリスト教と、キリスト教が伝



コンゲンスガータ28の階段から

わる以前の地元の信仰が融合しており、ノルウェー特有の建築であるスターヴ教会等に見られるものです。同じ道を今度は南に向かってコンゲンスガータ21まで歩きましょう。コンゲンスガータ21では、ノルウェーのバイキング時代や中世から着想を得たドラゴン様式に影響された建築となっています。

オーレスンは外国人の手によって作られたと思う人がいるほど、他のノルウェーの都市とは景観が異なっています。しかし、大火災後の再建を担った建築家は、実は全てノルウェー人でした。とは言え、彼らの多くはドイツやオーストリア、イングランドやスコットランドで教育を受けていました。彼ら一人ひとりが各国でアール・ヌーヴォーという当時流行していた建築様式に触発され、それをオーレスンの建築デザインに表現したのです。

1904年から1907年は、国家主義や国民的ロマン主義の風がノルウェーを吹き抜けている真っ只中でもありました。そのころは国のアイデンティティが構築されつつあった時期であり、建築もこういった風潮を反映させることが求められました。それゆえに建築家達が中世ノルウェーからインスピレーションを受けたのも当然の事で、芸術や工芸、その他の様々な物もノルウェーの伝統を表していました。



大火災後の1905年に建てられた建物を再現したコンゲンスガータ19

“キャプテンの家”を意味する「シッペルゴルデン (Skippergarden)」という言葉が壁に掲げられているのはコンゲンスガータ18です。この建物の特徴は、再建の際に以前建っていた建物をそっくり複製した点にあります。大火災後、1905年に再建されたこの建物は、1970年代中頃にはかなり荒れ果てており、取り壊すこととなりました。しかしその頃にはオーレスンの街並みはその価値が見出されており、コンゲンスガータ18も1905年当時の建物をそっくり再現することが決まったのです。その10年前であれば、こうはいかなかったでしょう。というのもそのころ、周囲の景観を乱さない建物を建てるなど、誰も考えもしなかったからです。

パビリオンの隣のレリーフはオーレスンの作曲家および音楽家であったペール・ボルスタ (Per Bolstad) (1875~1967) のものです。その区画は特にワルツやポルカで有名なボルスタにちなんで名付けられました。レリーフの製作者は彫刻家のカーリ・ロルフソン (Kari Rolfson) で、スンモーレ・アルバイデル・アヴィース新聞 (Sunnmøre Arbeideravis) によって公開されましたが、設置当時の1975年にはヒッペルヴィークトルゲ広場 (Kipperviktorget) にありました。



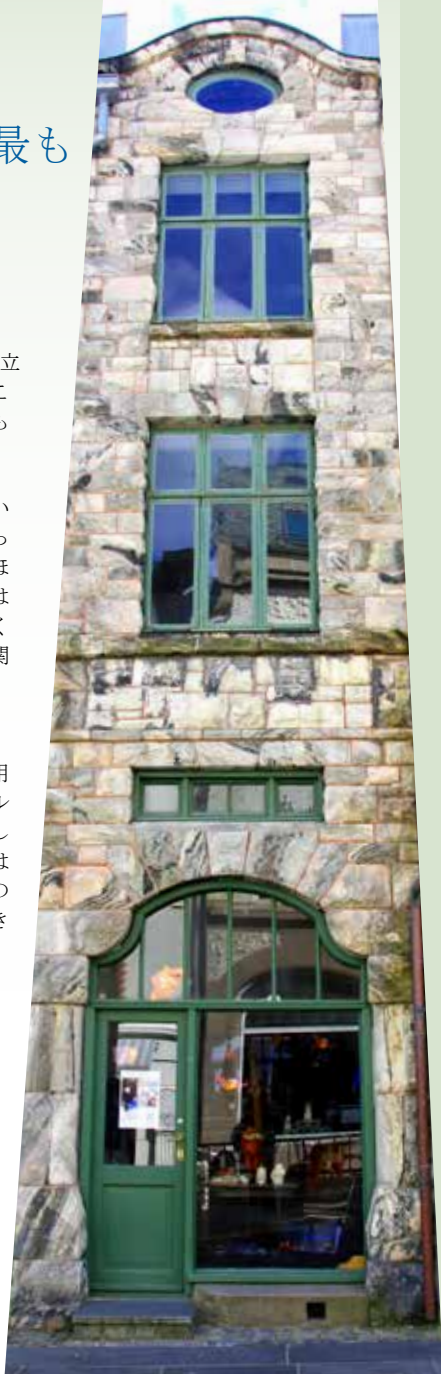
オーレスンで最も 幅の狭い家

コンゲンスガータ10Bの隣で立ち止まってみてください。ここも大火災の後建てられたものです。

「オーレスンで最も幅の狭い家」は奥に行くほど広がっており、ここからの見た目は狭くはありません。とは言え、この家で上の階に行くには、実は隣の家の正面玄関を経由しなければなりません。

難しい立地を最も巧みに活用した建築家、カール・ノールム（Karl Norum）は天才でした。外装に使われている石はノールモーレ（Nordmøre）のアイデ（Eide）から運ばれてきました。コンゲンスガータ10Bは文化財に登録されています。

コンゲンスガータ10B





階段はコンゲンスガータ21通りからリーハウグガータ通りへと続く。
さらに直進すると、ビーバルケンという名の公園がある。

「千の階段」とリーハウグガータ通り

コンゲンスガータ6と8の間にある53段の階段は、リーハウグガータ通り (Lihauggata) へと通じています。この階段は「千の階段」として知られています。リーハウゲン (Lihaugen) はオーレスンに残っている数少ない丘の一つです。小さな丘は時代の経過と共に、次から次へと平地にされていきました。かつてのオーレスンには今よりもっと多くの丘がありました。

1904年1月の大火災での唯一の被害者は、この丘に住んでいました。皮肉にも、彼女の家の隣には消防署がありました。この女性は高齢でしたが、いったんは火災から無事に逃れることができました。しかしもっと多くの所持品を持ち出そうと、再度家に戻ってしまったのです。

1970年代、アール・ヌーヴォーへの関心は文化的、歴史的な現象として高まりました。オーレスンの人々はその街並みの文化的な価値に気づき、残された建築物を保存しようという気運が高まりました。



コンゲンスガータ通りの東端

写真：Fred Jonny Hammerø（モーレ・オ・ロムスダール）

コンゲンスガータ6はうまく保存された建築物の好例です。この建物は、歴史ある建築様式をそのままに、居住者や事業者の機能性をも保っています。

隣の建物、コンゲンスガータ4は1960年頃、一階と二階がモダンな外観に作り替えられましたが、1984年に1905年当時の外見に復元されました。

“新聞配達の少年”を意味する「アヴィーズグッテン(Avisgutten)」は1998年、新聞社の「スンモーシュポステン(Sunnmørsposten)」からオーレスンへ寄付されました。銅像はアルネ＝マッティン・ハンセンによって製作されました。





写真の一番左端に写る建物がロンネベルグブーア (Rønnebergbua) のノーテネスガータ9 (Notenesgata9)。

左の古い写真は、コーシェガータ通り (Korsegata)-ノーテネスガータ通りの十字路から撮影

3 サンクト・オーラヴス・プラッ ス広場とロンネベルグブーア

コンゲンスガータ通りを通過し、サンクト・オーラヴス・プラッス広場 (St Olavsplass) を横切ってロンネベルグ (Rønneberg) の建物方面に歩き続けましょう。ここ50年で多くの海が埋め立てられ、陸地になりました。かつてはサンクト・オーラヴス・プラッス広場の一番端にあるどっしりとした灰色の御影石の建物のすぐ隣から海でした。ノールモーレのアイデから運ばれた明るい大理石で覆われたこの建物は、埠頭倉庫として建てられました。ロンネベルグの倉庫は1907年、カール=E・ロンネベルグ・オ・ソンネル社によって、オーレスンの歴史ある会社が1812年以来軒を連ねるノーテネセ (Noteneset) と呼ばれる地区に建てられました。

その後、ロンネベルグの建物周辺は埋め立てられ、海に隣接する建物ではなくなりました。ロンネベルグの倉庫のイメージ図を描いたのは、建築家のカール・ノルムでした。





市庁舎地区
(右)鳥の住む崖の北側



4

ロンネベルグハウゲンと 市庁舎地区

ロンネベルグからは、オーレスンの新市街にあるショッピングセンターのクレンメルゴルデン (Kremmergaarden) や、オーレスン市庁舎の方角が見渡せます。それらの新しい建物は、かつてロンネベルグの丘があったところに建っています。この小さな丘の側面は急な崖になっていました。崖はオーレスンの街の中心部にあったにも関わらず、1950年代頃からたくさんのカモメが巣を作り始めました。残念ながら崖は、市庁舎やショッピングセンターへの道を作るため、南部は1971年に、北部とロンネベルグの部分は1973年に潰されてしまいました。



ヘッレブローアから見たアルベイデレン

5

ノーテネスガータ通りと アルベイデレン

今度は入り江とかつて旋回橋だったヘッレブローア橋 (Hellebroa) に向かって西に歩きましょう。ここには1906年に建てられたオーレスン貿易組合会館「アルベイデレン (Arbeideren)」があります。現在この建物はオーレスン市によって所有されています。これは建築家のクリスチャン・リーヴェルツ (Kristian Rivertz) とハインリッック・ユルゲンセン (Heinrich Jurgensen) によって設計されました。

その独特の外観は、ネオクラシカルな柱と寺院風の切り妻壁に加え、アール・ヌーヴォーのディテールや装飾、および鍵穴型の扉や窓といった要素が融合しています。内装は明るく優美な装飾を持ったアール・ヌーヴォーの形式で美しく飾り付けられています。近年では我々オーレスンの住民はアルベイデレンのことをノルウェーで最も素晴らしい多目的施設の一つだと考えています。この建物は1997年に文化財に登録され、オーレスンの社会や文化にとって重要な役割を担っています。



ロルケネスガータ通り 1 から3。内装は近代化されたが、外装は1906年のまま。(右) 1904年に起きた町の大火災の直後のヘッレブローア橋。

ヘッレブローア橋周辺

ヘッレブローア橋から道を隔てた向こう側にある、石で覆われた2つの建物は、元々の外装はそのままに保存され、内装が改装され取り替えられた建物の好例です。また、後にこの建物はブロスンネ (Brosundet) 側に増築されました。この増築部分に関しては、その地域にある古い建物の外装を模したデザインとし、周囲との調和が保てるよう配慮されました。

オーレスンネ水道 (Ålesundet) にかかるヘッレブローア橋は、ノルヴォイア島 (Nørvøya) とアスポイア島 (Aspøya) の2つの島を結んでいます。橋はオーレスンのちょうど中心に位置します。そこから入り江にそって北を見ると、オーレスンネ水道が一望できます。“ニシンおばさん”を意味する「シルデコーナ (Sildekona)」の像は1991年にトーレ＝ビョルン・シヨルスヴィーク (Tore Bjørn Skjølsvik) によって製作されました。





ヘッレブローア橋から北側を眺めた様子。1904年の町の大火災の直前(右)と現在のオーレスネ水道。



6

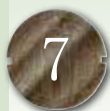
オーレスネ水道

もし入り江沿いの景色をゆっくり楽しむのに、ヘッレブローア橋の交通量は多すぎると思われるのであれば、水辺の端にあるアポテケルトルゲ広場 (Apotekertorget) の銅像の所まで歩いてみてください。

大きな像は1967年に彫刻家のクヌート・シンナルラン (Knut Skinnarland) によって製作されました。作者は若い情熱や未来への期待を象徴する像として、“見習い漁師”を意味する「スコールンゲン (Skårungen)」の名で呼んでいましたが、私たちは“漁師の少年”を意味する「フィスケグッテン (Fiskergutten)」と呼んでいます。

もう一つの像「ニシンおばさん」は、ニシンを塩漬けにする仕事をしている女性を称えるために作成されました。この像は、有志の市民と企業からオーレスネ市への寄贈品で、作者は彫刻家のトーレ＝ビョルン・ショルスヴィークです。





ユーゲントシュティール・ センターと スヴァーネアポテーケ

私たちが今立っている場所からは通りを挟んで見えるアポテーケルガータ16は、オーレスンの再建時代から建つ特徴的な建物です。これはスヴァーネアポテーケ (Svaneapoteket) という名の薬局、およびオヴレ家 (Øvre) の個人住宅として建てられました。この建物はその後オーレスン・スパーレバンク (Ålesund Sparebank) によって購入され、外装が復元されました。内装に関しては、家としての使用が可能となるようリノベーションが加えられましたが、一部はかつての建物のように修復されました。薬局の部分は1907年の建設以来、完全な形で保存されています。

アポテーケルガータ16
店内と薬局の内装





アポテケルガータ16の玄関ドアの上にある白鳥
(右)同じ建物についている時計

アポテケルガータ16は建築家によって、大枠だけでなく細部も熟考され、形作られた威厳ある建物です。スヴァーネアポテケはノルウェー中世の遺産的価値をより高めました。建物の装飾に加え、ノルウェーの天然石を使用している点からも、その価値を感じ取れるでしょう。ちなみにその石は、ノルウェー南部のオストフォル県 (Ostfold)、イッデフィヨルド (Iddefjorden) から運ばれてきたものでした。

薬局はオーレスンで最も古い施設の一つで、1819年（1818年という説もあります）に開店したといわれています。2001年の薬局の閉店後、この建物はユージェントシュティール・センターとして利用されています。

ユージェントシュティール・センターは2003年6月6日、ノルウェーのソニア王妃によって正式にオープンしました。これはアール・ヌーヴォー、またユージェント・シュティールのための国立センターです。内装の大部分が保存、または復元されました。センターでは、常設展と特別展が3つのフロアに渡って展示されています。ここでは広告から宝石、マルチメディアの展示まで、ノルウェーのユエグ



2011年4月6日の州訪問の際、オーレスンの通りを歩くノルウェー国王とリトアニア大統領のダリア・グリバウスカйте。
(左) 1910年頃のブルーンホルムガータ通り (Brunholmata) にあった砂利道。

ント・シュティール、アール・ヌーヴォーを幅広く鑑賞することができます。

ユーゲントシュティール・センターにはカフェとミュージアムショップがあります。開館時間中は資料館と図書館も一般開放されています。センターにはアール・ヌーヴォーの歴史、建築、それに管理等を司る専門部署があり、また、様々な資料をアーカイブとして保存する部署もあります。また、センターはクーベ美術館 (KUBE) とともに文化地域財団 (Stiftelsen Kulturkvartalet) を構成しています。

オーレスンの道路についてもお話ししましょう。大火災の後、地面は舗装されずに数年が過ぎました。砂利道は乾燥した時にはほこりっぽく、濡れた時は泥だらけになりました。1915年、玉石を敷く作業が始まりました。それは骨の折れる工程で、町の中心部の通り、つまり石の建物を造る事を義務づけられた地域、アール・ヌーヴォー地区の大部分の舗装が完了したのは1930年のことでした。

いくつかの通りは今でも玉石が敷かれています。見た目は非常に良



オーレスン

- 1 スカーテフルーカイア波止場とスカンセカイア波止場
- 2 コンゲンスガータ通り（歩行者区域）
- 3 サンクト・オーラヴス・プlass広場とロンネベルグブーア
- 4 ロンネベルグハウゲン (Rønneberghaugen) と市庁舎地区
- 5 ノーテネスガータ通り、アルベイデレンおよびヘッレブローア橋
- 6 オーレスンネ水道
- 7 ユーゲントシュティール・センターとスヴァーネアポテーク
- 8 アポテークルガータ通りおよびバックゲータ通りの倉庫
- 9 木造住宅町、モルヤ (Molja) とモーローヴェーゲン通り
- 10 アスポイ・スコール学校およびラティーン・スコール学校



散歩マップ

- 11 オーレスン教会
- 12 アスペガータ通り、石造りと木造の境界、ヒルケガータ通り (Kirkegata)
- 13 ネードレ・ストランガータ通り、プレステブリッガ波止場、
ストールネスカイア (Storneskaia)
- 14 オーレスン市庁舎
- 15 カイセル・ヴィルヘルムスガータ通り
- 16 ヒーペルヴィークトルゲ広場
- 17 刑務所とヒーペルヴィーカガータ通り
- 18 ビーパルケン
- 19 フィエルステューアカフェおよびアクスラ山への山道
- 20 アクスラ山とフィエルステューアカフェ



アポテケルガータ5と7の間から
1904年の大火災前の漁業倉庫で撮った古い写真

8 倉庫とアポテケルガータ通り

アポテケルガータ通りに沿って、バックゲータ通り (Bakkegata) と交差する地点まで歩いていきましょう。この通りの建物は建設以来、外装はほとんど変わっていません。一方で内装に関しては、建物の各持ち主達はその時々暮らしに合わせ、適宜手を加えてきました。

例えば水辺に建つ建物の多くは、元々は魚の受け取りや加工のために作られた倉庫でした。今ではこの建物はその役目を終え、レストランや広告事務局、オフィス、カフェ、ホテル、それに賃貸アパートなどとして利用されています。



アポテケルガータ8と6の間から、バックガータ通りを見上げた様子。
(下) オヴレガータ通りとバックガータ通りの交差点から

バックガータ通りの要塞と尖塔

アポテケルガータ通りとバックガータ通りの間を見上げると、それぞれの建物の角にある塔の間から坂の上にある別の塔の姿も見え、この地理的起伏を感じ取ることができます。これらの塔は、ここノルウェーやヨーロッパの他の場所の古い要塞建築の影響を受けていると言われています。

そのままアポテケルガータ通り沿いに真っ直ぐ進み、モーローヴェーゲン通り(Molovegen)のホテルを過ぎたところで左に曲がりましょう。





スカンセカイア波止場からのモルヨ方面の眺め



9

木造住宅群

モーローヴェーゲン通りをさらに進むと、オーレスンで最も活気にあふれ、最も歴史があり、また最も中心にある港へ続く防波堤が見えてきます。ここはモルヨ (Moljå) と呼ばれる区域です。ここではオーレスンの原型に触れることができます。防波堤は1854年からあり、灯台は1858年に建てられました。今ではこの灯台はホテルとして使用されています。

防波堤が陸地に接する場所にある、大きな白い木造の家は1861年に建てられました。その向こうにある家々は、それと同じ時代か少し後に建てられました。

建物はオーレスン博物館の重要な部門の一つ、水産博物館として使われています。



(右) モーローヴェーゲン通りでの温暖で心地の良い夏の日



モルヨとモーローヴェーゲン通り

1800年代のオーレスンの建造物は、大半が水産博物館のある モーローヴェーゲン10とその近辺に現存する木造住宅と同じ様式でした。この一角はその立地ゆえ、1904年の大火災の炎を逃れ、まるで島のように当時の建物群が残ったのです。海沿いに倉庫が建ち並び、それに混ざって居住用家屋が密集しているのも、オーレスンの町並みの象徴と言えるでしょう。このようにして、多くの古いオーレスンの建物は一つの場所に集中することになったのです。

最も古い倉庫は1904年以前に建てられた木造建築です。大火災の後、再建する建築物は全て石造りとすることが定められました。その範囲は、今立っているモルヨから少し西へ行ったところにある出火元となった工場から、東はビーパルケン (Byparken) よりもさらに数百メートル東までと、かなりの広範囲に渡りました。



スカンセカイア波止場の奥に見える黄色の建物が1921年に建てられたアスポイ・スコール学校。

10

アスポイ・スコール学校と ラティーン・スコール学校

モルヨを離れる前に、水辺の白い倉庫群の背後の丘の上に建つ、大きな黄色い建物についてご説明しましょう。これは古い宮殿でも病院でもなく、1921年に建てられたアスポイ・スコール学校 (Aspøyskole) です。

モーローヴェーゲン通りを戻り、今度はオーレスン教会に通じるオヴレガータ通り (Øvregata) を歩いてみましょう。ラティーンスコールレガータ通り (Latinskolegata) との交差点まで来たら左折し、「ラティーン・スコール学校 (Latinskolen)」に立ち寄ってみてください。その中庭からは1907年に建てられた校舎の見事な外観装飾を見ることができます。現在この建物は、オーレスンの教育機関によって管理されています。





建物が密集した町の中で、オーレスン教会は格好のロケーションに位置する。

11 オーレスン教会

オーレスン教会は、周りを取り囲むスレート屋根や人々の往来、喧騒と賑わいの中、ひときわ高くそびえたち、アスポイア島の島を見下ろしています。町で同じ高さの建物はほとんどなく、町の景観の目印となっています。

1909年9月に完成したこの建物は、キリスト教の歴史からすればそれほど古いとは言えません。しかしその土地に関しては、現教会が建つ前も教会があった聖なる地です。最初のオーレスン教会は1854年、この場に建設されましたが、完成からちょうど50年が経過した年、大火災で焼け落ちてしまったのです。新しい教会の設計デザインの案を募集すると、63個の提案が寄せられました。採用されたのは、建築家スヴァッレ・クヌーセン (Sverre Knudsen) の草稿、「アヴェ・マリア」でした。1906年の夏、ノルウェー王ホーコン7世がオーレスンを訪れ礎石を置いた後、建設工事が始まりました。建設過程では窓を大きくする等、一部デザインの変更がされました。窓が小さな設計案は中世の建築に強く影響されていたためですが、結果、教会の建物内部が納骨用の地下室のように真っ暗になってしまふことが判明したのです。



東から見たオーレスン教会。
(左) 教会の塔のクローズアップ

その教会は新しい割にデザインは古く、また暗い教会内部はプロテスタントを信仰する人々にとってみればカトリック教会を象徴するように感じられ、批判を浴びたのです。

3年後、新しい教会が完成しました。建築家の目標通り、古いノルウェーの教会建築と、1900年代初頭の流行が融合した建物が完成しました。一見すると紛れもなく新しい教会ですが、同時に過去の歴史に根差していることも見て取れる建築です。その静かな壮大さと優しい厳しさを兼ね備えた教会は、人々にとって心地よく自らを高める場となりました。教会を覆う石はノールモーレのアイデから運ばれてきました。雨の後に太陽光が降り注ぎ、石中の石英の結晶がキラキラと輝く教会は、特に美しく見えます。

この冊子では、オーレスンの町の魅力を歩いて見出すことを目的としており、建物の中に入ることを推奨するものではありません。しかし、この教会に関してはぜひ建物内も鑑賞されることをお勧めします。

教会の正面には1950年に公開されたフィン・エリクセン(Finn Eriksen)による記念碑で、“戦禍に倒れた人々の記憶”を意味する「ディ・ファルネ・ティル・ミンネ(De falne til mine)」があります。





アスペガータ通りの並木

12

石と木の境界、アスペガータ通りとヒルケガータ通り

教会の西側にあるのは、木々が一直線に並んだアスペガータ通り (Aspegata) という通りです。北から南に走るこの道は他の通りと比べるとかなり広く作られており、石の建物と木の建物の境界線となっています。この通りから東のノルヴォイア島にあるイエルデガータ通り (Gjerdegata) まで、新しく建てる建物は全てレンガもしくは石で作られるよう決められています。また、この広い通りは1904年の大火災を教訓に、火が燃え広がるのを阻止する役割も果たしています。

この通りより西側は木造建築が許可されているエリアです。古い家々の大部分は、大火災を逃れた西部に集まっています。ちなみに、アール・ヌーヴォー建築のヒルケガータ31の坂の下側の壁面には美しい女性の顔が再現されています。





ヒルケガータ 31はアスベガータ通りの交差点に立つ。



13 プレステブリッガ波止場とストールネスカイア

アスベガータ通りからオヴレ・ストランガータ通り (Øvre Strandgata) を経由し、プレステブリッガ (Prestebrygga) の波止場まで歩いて行きましょう。ここ、もしくは西のスカールボーヴィカ湾 (Skarbøvika) 周辺の港に停泊している貨物船がいたら、積荷はクリップフィスク (klippfisk) である可能性が高いでしょう。クリップフィスクとは乾燥もしくは塩漬けたタラ、カドック、コラック、もしくはタスクといった魚のことで、オーレスンはノルウェーで最大の輸出港なのです。オーレスンが貿易都市として発展したのは紛れもなくこの事業が基盤にあり、また、今日のオーレスンがノルウェー漁業の都と呼ばれる理由です。

ネードレ・ストランガータ通り (Nedre Strandgata) 沿いに進み、ヘッレブローア橋を渡ると、ノルヴォイア島に戻ります。ロルケネスガータ通り (Lorkenesgata) 沿いに歩いて市庁舎を通り過ぎ、その前にあるローフスプラッセン広場 (Rådhusplassen) に向かいましょう。



2010年1月のリノベーション前の市庁舎地区と
ローフスブラッセン広場
(右) ロンネベルグの丘がなくなる前にストール
ネスビーレン埠頭(Stornespiren)から撮ら
れた写真。



14 オーレスン市庁舎

ローフスブラッセン広場には以前、ロンネベルグの丘がありました。1970年頃、この小さな丘を撤去すべきかどうかの議論がなされていました。丘の撤去側の言い分は様々でしたが、その中の一つは、オーレスンの行政機関が集約される市庁舎を建設するための、まとまった土地が必要であるということでした。今日ではこの市庁舎地区全体が、人々や事業が集まる中心地となっています。

4.5メートルあるコンクリートの像はエルフの王、オーベロン(Oberon)です。彫刻家のボーゲ・ベルグ(Boge Berg)によってデザインされ製作されました。

引き続き、カイセル・ヴィルヘルムスガータ通り(Keiser Wilhelmsgata)の方向に歩いて行きましょう。



カイセル・ヴィルヘルムスガータ通りは近代のオーレスンの象徴といえる。

15 カイセル・ヴィルヘルムス ガータ通り

銀行の前にある広場はハーラル・トーシュヴィークス・プラッス広場 (Harald Torsviks plass) です。建物に面して立つと、左手にヒーペルヴィーカガータ通り (Kipervikgata)、右手にカイセル・ヴィルヘルムスガータ通りとなります。ヒーペルヴィーカ地区 (Kipervika) は、この2つの通りとヒーペルヴィークトルゲ広場 (Kiperviktorget) を含むエリアです。グリンメルガータ通り (Grimmergata) の階段を上ればオーレスン博物館があります。この地区を訪れる際にぜひ行ってみてください。

今では面影もありますが、かつてはすぐそこまでが海でした。また、ヒーペルヴィーカは樽作りで有名な地区で、名前も樽作りに欠かせない銅 (kobber) に由来します。ここにある”樽職人”を意味するブロンズ像「ボットケーレン (Bødtkeren)」というブロンズ像はオーレスン設立150周年を記念して、スパーレバンケン・モーレ (Sparebanken Møre) からオーレスン市へ寄贈されたものでした。

製作者はオーラヴ＝レーオン・ローアル (Olav Leon Roald) です。





カイセル・ヴィルヘルムスガータ通り沿いに東方向を見る。
(右) ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世と正妻のアウグステ・ヴィクトリア。



オーレスンの通りの名前が、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世 (Kaiser Wilhelm) にちなんでいるのには理由があります。

1888年から1918年のドイツ皇帝ヴィルヘルム2世は、彼のヨット「ホーエンツォレルン (Hohenzollern)」でノルウェー西部のフィヨルド地域へしばしば休暇に来ていました。彼は西部の田舎の風景や、スンモーレのフィヨルドと山々を崇拝していました。オーレスンの大火災の知らせを耳にすると、彼はただちに救助船三隻分の食料、薬、建築資材、毛布をオーレスンへ送りました。その他の地域からも救援物資が届いていましたが、ヴィルヘルム2世からの援助は他を見劣りさせるほど、量も質も迅速さも秀でていました。ハーラル・トーシュヴィークス・ plass 広場の右を少し内陸へ進んだ所がヒーペルヴィークトルゲ広場です。



早朝に撮影されたヒーペルヴィークトルゲ広場。

16 ヒーペルヴィークトルゲ広場の市場

ヒーペルヴィークトルゲ広場で開催される市場は活気があり、人気の高いスポットです。土曜日は特に賑わいます。1950年代、海は今公園のベンチがある所まで来ていました。現在その目の前にある道は、部分的に充填材やコンクリートの柱によって支えられています。

市場の端のベンチの隣にある記念碑は、“海へ”を意味する「モート・ハーヴェ (Mot Havet)」として、もしくはシンプルに「ブーホルムの記念碑」として知られています。この像はヒアステン・コッキン (Kirsten Kokkin) によって製作され、1989年6月6日に公開されました。1885年に起きた嵐のため死亡した33人の漁師を偲んで作られたものです。彼らの多くはブーホルム (Buholm) またはロイサ (Røysa) の出身で、その死により29人が未亡人となり、113人の子供が父を失うこととなりました。





大火災の後、1907年に建てられた地方裁判所。
オーレスンの刑務所が背後にある。

17 刑務所、地方裁判所、 ヒーペルヴィーカガータ通り

ヒーペルヴィーカガータ通りとローストゥガータ通り (Rådstugata) の交差点にあるオーレスン刑務所の前まで行きましょう。これは1864年に建てられた非常に古い建物です。建物内部は1904年に焼けてしまいましたが、石壁は再利用され、建物は今でも刑務所として使われています。ヒーペルヴィーカガータ通り側の扉の上にライオンの紋章が付いた大きな黄色い建物は、かつて地域裁判所と刑務所でした。

1904年の大火災の際、刑務所には14人の囚人がいました。刑務所が焼け落ちそうだと気付いたとき、看守は囚人達に逃げるように言いました。「だが明日には戻ってこい！」彼はそう付け加えたと言われています。刑務所は1907年に再建されました。裁判所の建物は現在刑務所の管理室として使われています。新しい地方裁判所は1980年代にアスボイア島に建てられました。



アクスラ山の麓にあるビーパルケンの5月17日の憲法記念日の様子

18 ビーパルケン

ローストゥガータ通りの坂道を上っていくと公園があります。ベンチで一休みしましょう。この公園は、ごみごみとしたオーレスンで暮らし、馬車やその他の騒音に悩まされる町の人々に、安らぎと休養の場を与えることを目的に、1885年に作られました。

公園の景観はイギリス風です。丘の上の青々とした木々、花畑の間を小道が通り、その景観は非常に高い評価を得ています。2010年にはリニューアルを行いました。

園内の植物は国内の他の公園で見られるものも多々あります。しかし、チリ産の大型針葉樹のチリマツ、別名「猿の困惑」が生えているのは珍しいでしょう。おそらく1900年代初頭に、オーレスンの商人によって南米大陸から持ち込まれたと考えられています。

オーレスンの西にある島ギスケ (Giske) またはヴィグラ (Vigra) からやって来たとされるロッロン (Rollon)、またの名をガング・ロルヴ (Gange Rolv) というバイキングがいました。彼はノルウェーから追



オーレスンのビーバルケンに立つロッロン（ガンゲ・ロルヴ）の像

放されて国を去り、最終的にはフランスに定住しました。911年、彼はそこにノルマンディー公国を建国したと言われています。

1863年には、フランス人彫刻家アルセーヌ・ルテリエによって御影石で作られたロッロンの石像が、ノルマンディーのルーアンにある公園に立てられました。1911年には、ルーアンでノルマンディー公国建国千周年記念の式典が開催されました。その際、彼の像の銅製のレプリカを生誕の地にも贈ろうというアイデアが生まれ、同年9月にこの公園に設置されました。アメリカのノースダコタ州にも、また別のレプリカが置かれています。

1996年には更なる記念式典がノルマンディーで行われ、それ以来オーレスンとセーヌ河畔のエウ市は、友好関係を保っています。

フィエルステューアのカフェと アクスラ山 に続く階段

ビーパルケンから階段を418段上がったところにアクスラ山があります。中腹で少し休憩しましょう。ここからは、私たちが今まで歩いて来たエリア全体が一望できます。

今休憩している小さな三角形の土地はその形状から、地元の人々からは「アイロン」と呼ばれています。ここからはオーレスンの町を見渡せます。しかし、オーレスンはそこから見える範囲に留まりません。

ここから見えるのはオースレンで一番古い町です。ここは元祖オーレスンと呼ぶべきエリアで、1800年代初頭に最初の町が芽吹いた場所でした。ノルヴォイア島は私たちが今立っている場所のすぐ脇、そのさらに向こうがアスポイア島です。

アスポイア島とノルヴォイア島の間がオーレスンネ水道で、その入り江は地元ではブロースンネとして知られています。ここがオーレスンの地理的中心点です。オーレスンの名前の由来には諸説ありますが、最も有力な説は、ノルウェー語で“うなぎ”を表す‘ål’という単語から派生したというものです。かつては入り江でとれていたのかもしれませんが。別の説は“浅い水路の深い海峡”を意味する‘ål’という単語から来ているというものです。かつての入り江は深い海峡だったのです。

1800年代後半、町は入り江の岸から東は今私たちがいる山の裾に沿って拡大し、また西側にも、最も建物が密集しているアスポイア島に建つ教会のあたりまで広がりました。

既にご存知の通り、1904年1月23日、オーレスンは大火災により壊滅状態となりました。教会のあたりから燃え始め、山裾の右から左へ広がり、東まで燃え広がりました。今ここから見えるのは、火災の後に再建された市街です。



絶景ポイント「アイロン」は、公園とフィエルステューアのほぼ中間に位置する。



フィエルステューア上の道路からオーレスンの中心地を望む。
1904年の大火災後に撮影された右の写真と同じ位置から撮影。写真：Staaie Watto。

20

アクスラ山とフィエルステューアカフェ

公園から「アイロン」まで来たら、もう少し上ってフィエルステューアカフェ (Fjellstua) を目指しましょう。そこではオースレンやその周りの地区のさらに良い眺めが楽しめます。

フィエルステューアは、アクスラ山の最西端、標高130メートル地点に位置します。1903年に建てられた初代フィエルステューアは木造で、赤い塗装に白い縁が特徴でした。1904年の大火災は免れましたが、1934年に起きた火災で焼失してしまいました。新たに再建されたものは、設計者のイェンス・バング＝ブローテン (Jens Bang Braaten) によって、より実用的に作られました。以来、この建物は何度も部分的に改築されてきました。その展望台は、ノルウェーの中でも10本の指に入る絶景スポットです。

ルンスクーエ (Rundskue) と呼ばれる展望所は、アクスラ山の一番高い189メートル地点に位置しています。第二次世界大戦中、アクスラ山はヒトラーの構築した海岸防衛線「大西洋の壁」の一部となり、おびただしい数の砲座が設置された他、司令所や塹壕(ざんごう)も建設されました。



フィエルステューア上の道路からオーレスンの中心地を望む。
1904年の大火災後に撮影された右の写真と同じ位置から撮影。写真：Staaale Watto。

フィエルステューアの上にある小さな丘には、クニーヴェン (Kniven) と呼ばれるナイフ型の風見鶏があります。1861年から63年にかけて建設され、風向きを観測するために使われていました。クニーヴェンのすぐ下には、アルノルド・ハウケラン (Arnold Haukeland) によって製作された詩人兼アスリートのクリストッフェル・ランナーシュ (Kristoffer Randers) の像があります。これはもともと町のロンネベルグの丘の上に設置されていたものでした。今日では彼はスンモーレとヒヨルンフィヨルデン (Hjørundfjorden) の山々や、モッラダーレン (Molladalen) のランナーシュ・ピーク (Randers Peak) を見つめています。

さて、これでオーレスンの通りを歩き、公園を抜け、階段を上ってアクスラ山から海と島々を眺められる場所までやってくるツアーは終了です。

お疲れ様でした！





文化財登録されている建物。(上)ローヴェンヴォル・シネマ (Løvenvold)、(右)パルクガータ5 (Parkgata5) のかつての姿。

ノルウェーの重要文化財に指定されている歴史的建築物

ノルウェーの重要文化財として、保存の対象となっている建物は下記の通りです。

アポテケルガータ16： ユーゲン・シュティール - アール・ヌーヴォー・センター

アポテケルガータ5：ベルセット (Berset) の倉庫

アイナールヴィークガータ7： デーヴォル家の屋敷

カイセル・ヴィルヘルムスガータ40

コンゲンスガータ10 B：オーレスンで最も幅の狭い家

コンゲンスガータ12

ロルケネスガータ3：ラーシェン家の屋敷 (Larsen)

ロルケネスガータ2：アルバイデレン- 貿易組合会館

ローヴェンヴォルガータ11 (Løvenvold gata 11)：ローヴェンヴォル・シネマ

パルクガータ5： バッケ家の屋敷

ストールガータ23 (Storgata23)



新旧の建物が調和するオーレスン： Alfred Lüpke

今日までのオーレスン

良い港に恵まれ、豊かな魚礁にも近く、沿岸部に立地していることがオーレスンの成長礎となりました。1500年代前後に最初の商人が、入り江の近くに定住しました。200年以上かけ居住エリアは大きくなりました。オーレスンは小さな貿易港として、1793年に限定的ですが交易権を手に入れ、1824年には完全な自由交易権を取得しました。その際、ベルゲン、モルデ、クリスチャンスンやトロンハイムといった他のノルウェーの貿易都市から大きな反発を受けたと言います。

自由貿易権を得たその年、最初に出航したのはクリップフィスクを乗せた船で、オーレスンからスペインのビルバオに向けて送られました。1835年からはスペイン人がオーレスンにクリップフィスクと呼ばれる塩漬け乾燥タラを求めてやって来るようになりました。1870年頃まで続いた「スペイン時代」のおかげで、オーレスンは更なる経済発展を遂げました。

経済発展と人口増加のおかげで、1848年4月13日、町として認定されました。その頃には、人口はおよそ1500人に達していました。現在オーレスンには、およそ4.4万人が暮らしています。

表紙の写真は、ヒルケガータ10のタワーと切り妻屋根の一部です。裏表紙の写真は、1913年頃に建てられたヒーペルヴィーカガータ 27です。



出典: Harald Grytten 著 『"Til fots i Ålesund" (オーレスンを歩く) - オーレスンネ水道周辺の旧市街と新市街を歩く』の原稿を元に作成されました。また2011年に、オーレスン自治体の Eli Anne Tvergrov と Harald Grytten によって新たな情報が加えられました。2011

©

写真:

- ・ Aalesunds museum
- ・ Ålesund kommune
- ・ Eli Anne Tvergrov
- ・ Bjarte Alnes
- ・ Christine Rørvik
- ・ Ellen Viddal

